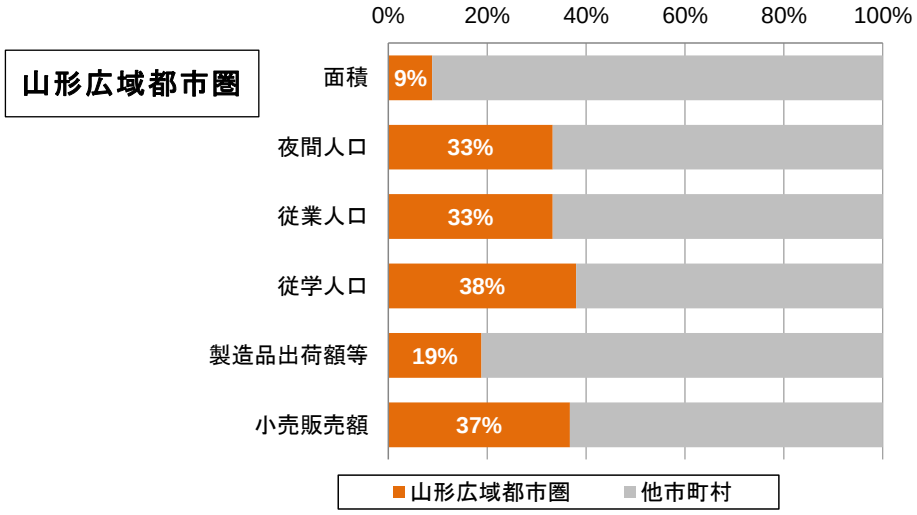
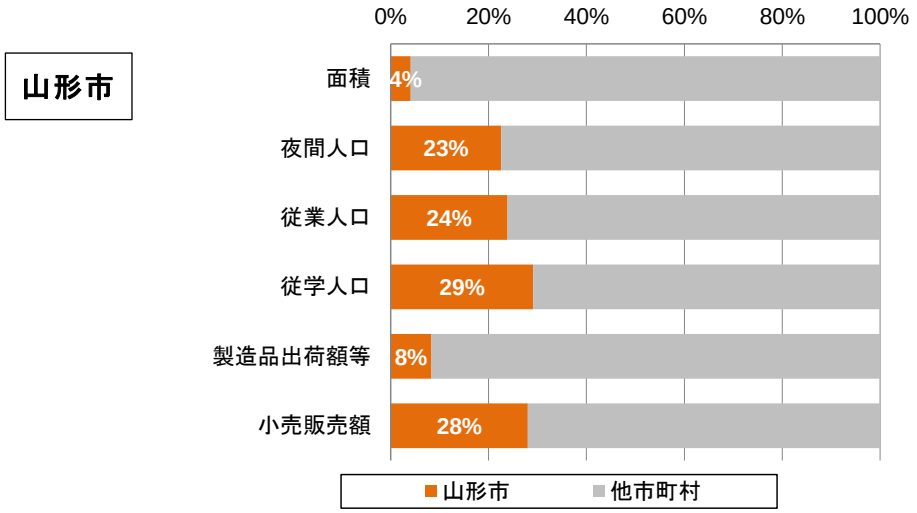
２ 山形広域都市圏における人口、市街地などの概況

（１） 山形県における県都としての位置づけ

山形県全体のうち、山形市および山形広域都市圏の占める面積はわずかになっておりますが、夜間人口や従業人口、従学人口などの人口集積、製造品出荷額等や小売販売額などの経済指標は高いシェアを占めています。山形市および山形広域都市圏は、産業・雇用・教育・商業などのあらゆる機能で山形県の中心的役割を果たしています。





出典：面積、夜間人口、従業人口、就学人口は平成２７年国勢調査
製造品出荷額等は平成２９年工業統計
小売業販売額は平成２６年商業統計

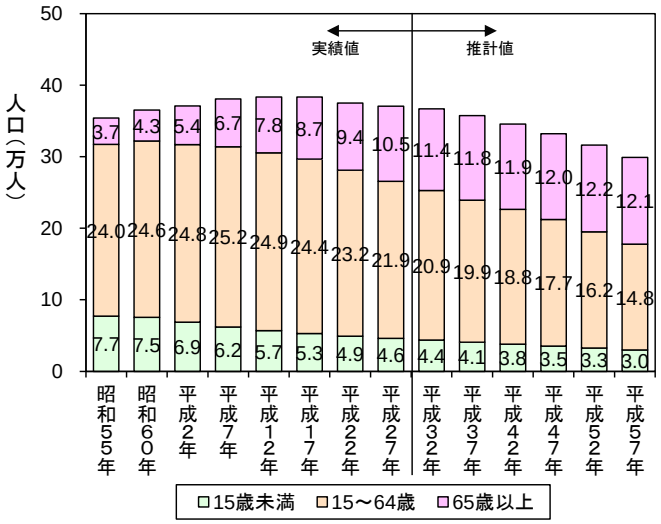
図　社会経済指標の対県シェア

（２）山形広域都市圏の人口および世帯の動向

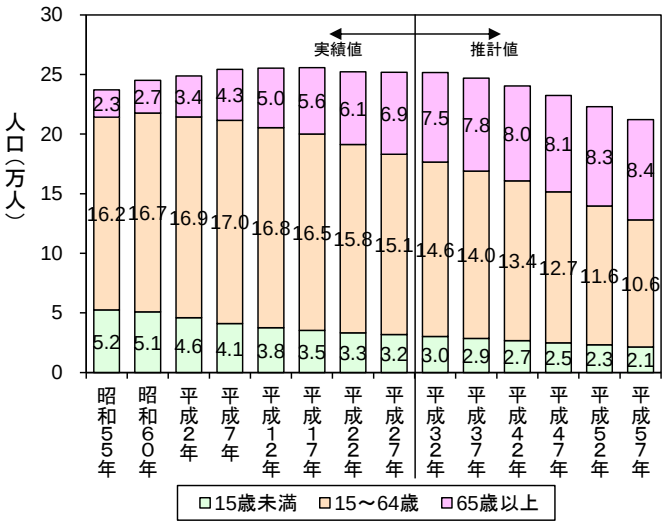
ア　人口の推移と将来見通し

山形市の人口は平成１７年をピークに減少傾向にあります。将来見通しとして、国立社会保障・人口問題研究所の将来人口推計によると、総人口は今後も減少し、高齢者の割合が増加していくものと推計されています。

山形広域都市圏



山形市



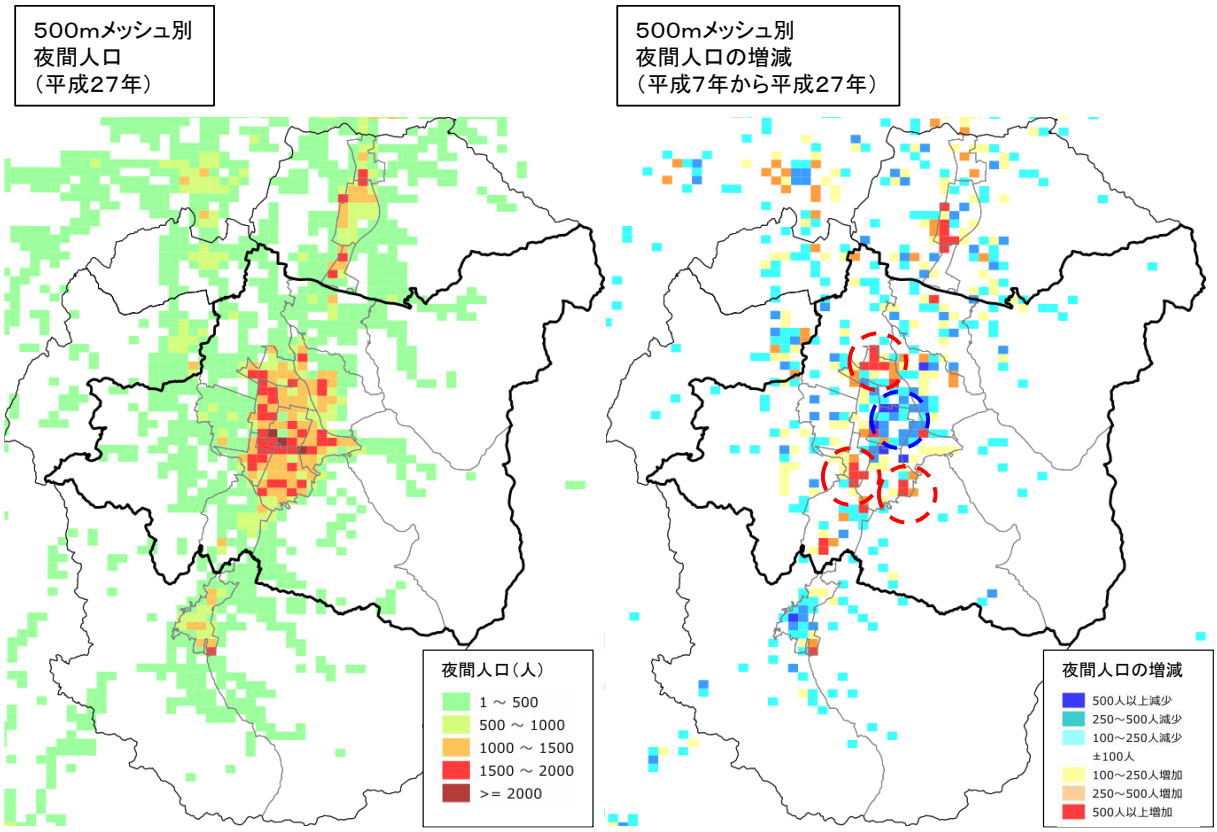
出典：実績値は各年の国勢調査
　　推計値は国立社会保障・人口問題研究所の「日本の地域別将来推計人口」

図　年齢３階層別の人口動向と将来見通し

イ　人口の地域分布

平成２７年の夜間人口の分布を見ると、山形市では市街化区域内に人口が集積しています。

過去２０年間の人口の増減を見ると、中心市街地で人口が減少し、嶋地区、吉原地区、上桜田地区などの郊外で増加しています。

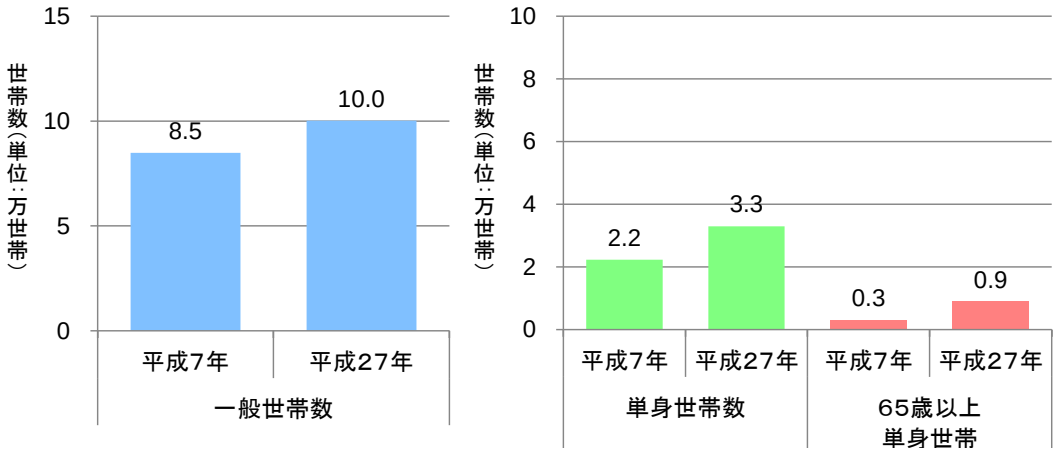


出典：平成７年･平成２７年国勢調査

図　５００ｍメッシュ別夜間人口と増減

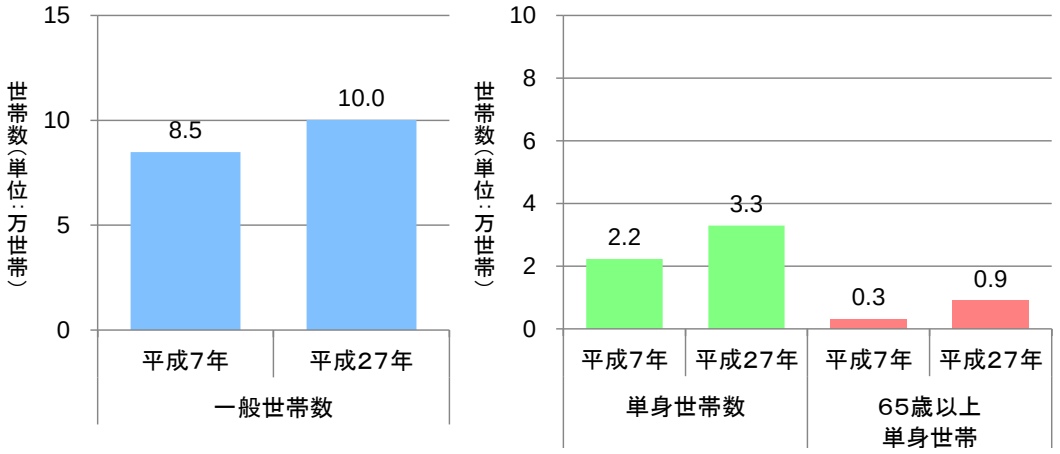
ウ　山形市における世帯数の変化

山形市の総世帯数は過去２０年で１．２倍に増加しています。そのうち、単身世帯数でみると１．５倍の伸びで、さらに６５歳以上の単身世帯に限定すると２．９倍の伸びになっています。山形広域都市圏で見ても、世帯数の変化は同様の傾向にあります。



出典：平成７年･平成２７年国勢調査

図　世帯数の変化（山形市）

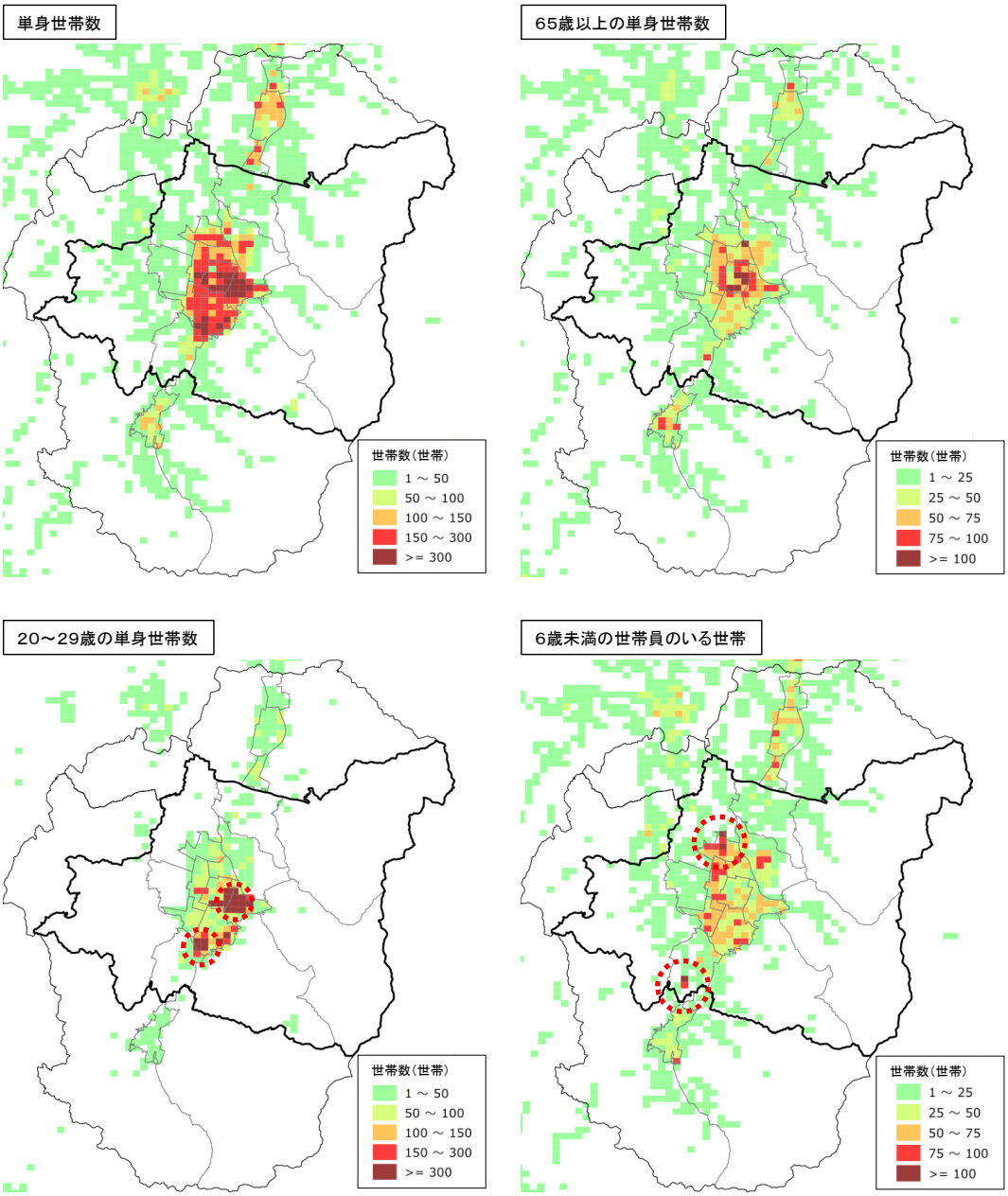


出典：平成７年･平成２７年国勢調査

図　世帯数の変化（山形広域都市圏）

エ　山形市における世帯の地域分布

世帯数の地域分布を見ると、単身世帯は市街化区域内に多く居住しています。単身世帯のうち、６５歳以上の高齢単身世帯に限定すると、山形市の中心部に多く居住している傾向が見られます。２０～２９歳の単身世帯の多くは学生が想定されますが、山形大学や東北芸術工科大学周辺に多く居住します。６歳未満の世帯員のいる世帯は、嶋地区やみはらしの丘地区などに比較的多く居住しています。



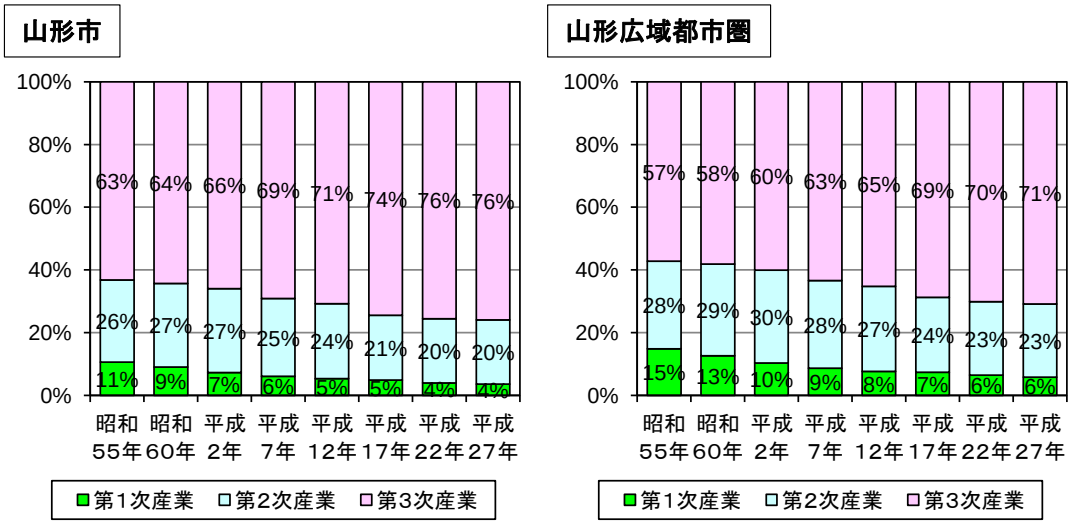
出典：平成２７年国勢調査

図　世帯の地域分布

オ　山形市の就業人口・従業人口の動向

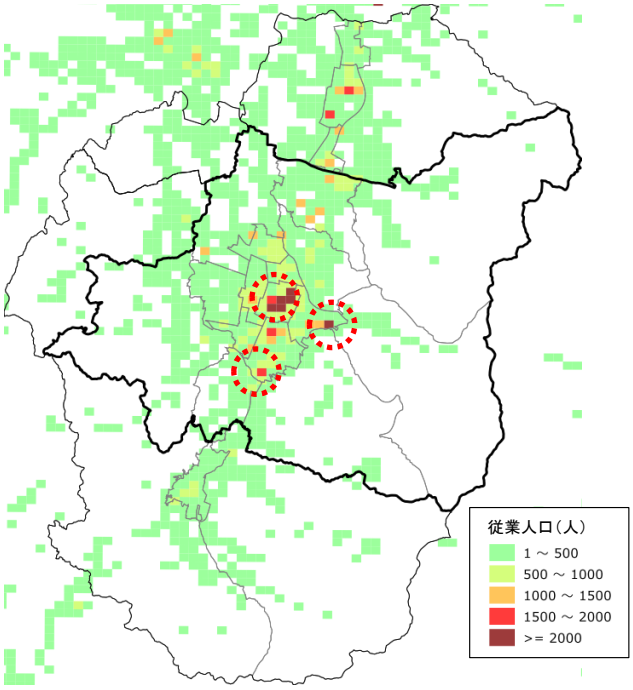
就業人口の産業別の割合では、山形市、山形広域都市圏ともに、第１次産業と第２次産業の就業者の割合が減少傾向にあります。

従業人口の分布では、山形市の中心部が多くなっており、業務機能が集積していることがわかります。その他、県庁周辺や山形大学医学部附属病院の周辺での従業者が多いことがわかります。



出典：各年の国勢調査

図　就業人口の産業割合の推移



出典：平成２６年経済センサス基礎調査

図　従業人口の地域分布（全産業：平成２６年）

（３）市街地の動向

ＤＩＤ（人口集中地区）の面積と人口は、過去から現在にかけて増加していますが、市街地が薄く広がってきているため、ＤＩＤの人口密度で見ると減少しています。

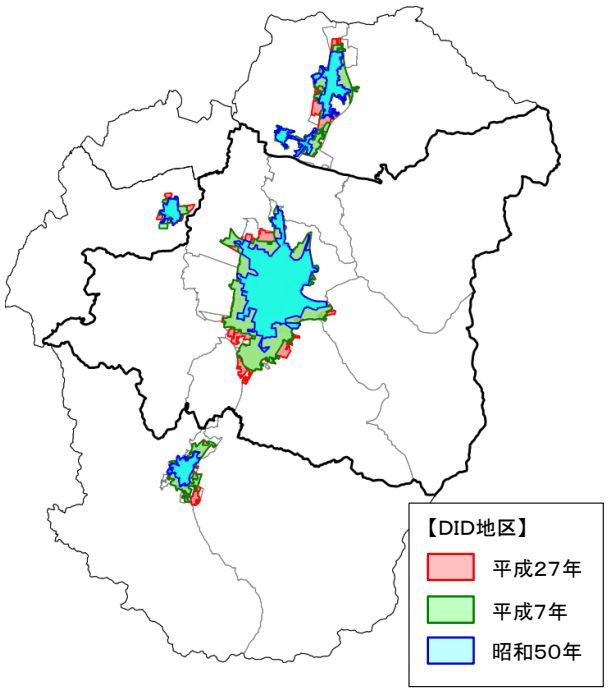
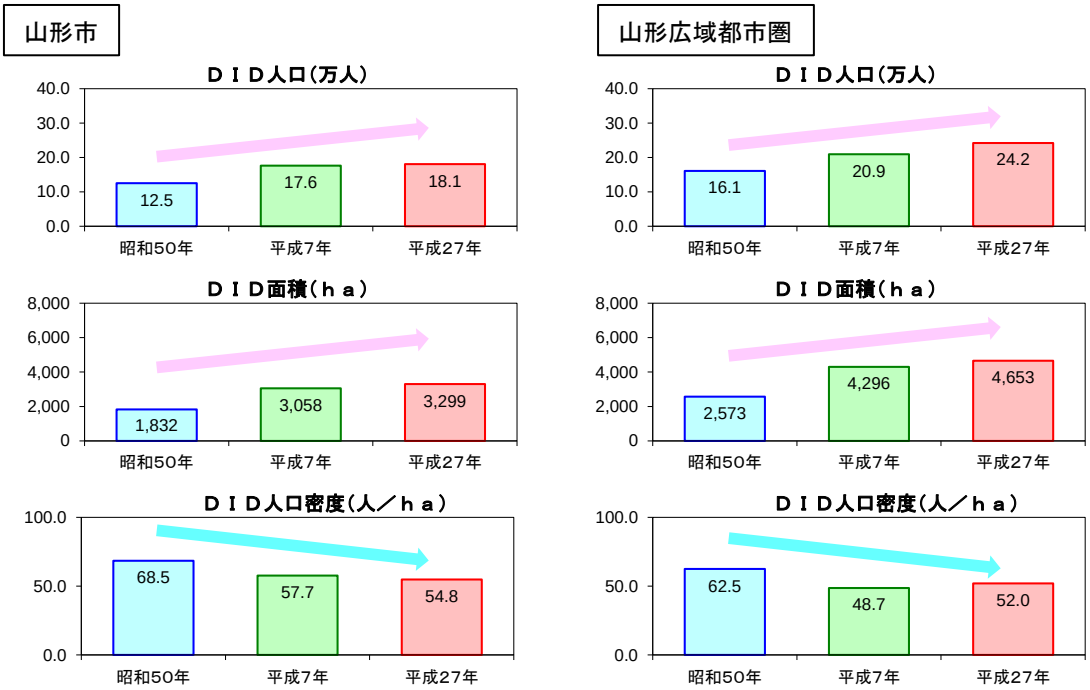


図　山形広域都市圏のＤＩＤ地区(人口集中地区)の変化



出典：昭和５０年、平成７年は国土数値情報、平成２７年は国勢調査

図　ＤＩＤ人口密度の変化

（4）施設立地の動向

山形広域都市圏の都市機能施設の立地状況は以下のとおりです。山形市内の市街化区域内や天童市の中心部に、都市機能施設が集積しています。その他、幹線道路沿いにも施設が立地していることがわかります。

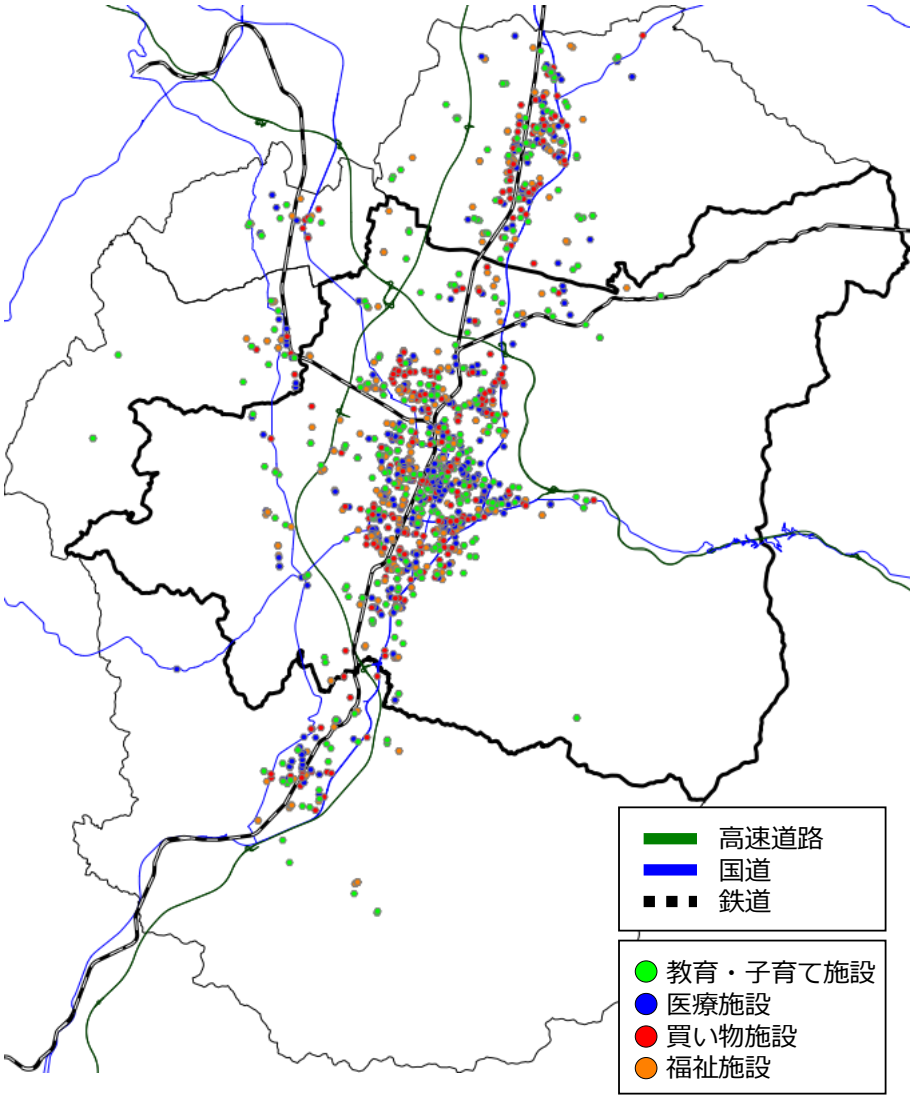


図　都市機能施設のプロット（全都市機能）

地区別に施設の立地密度を見ると、山形市の都心地域に各種機能の施設が多く立地しています。

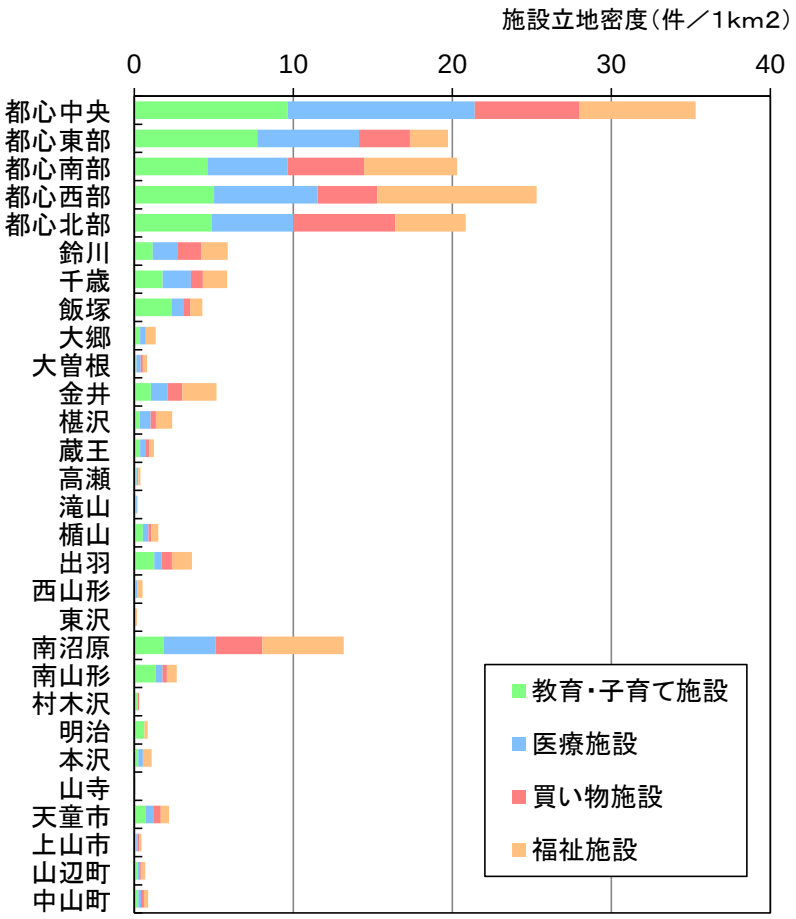


図　２５地域別都市機能施設の立地密度

都市機能施設のうち、店舗面積の大きい買い物施設に着目をしてみると、郊外地域に多く立地していることがわかります。

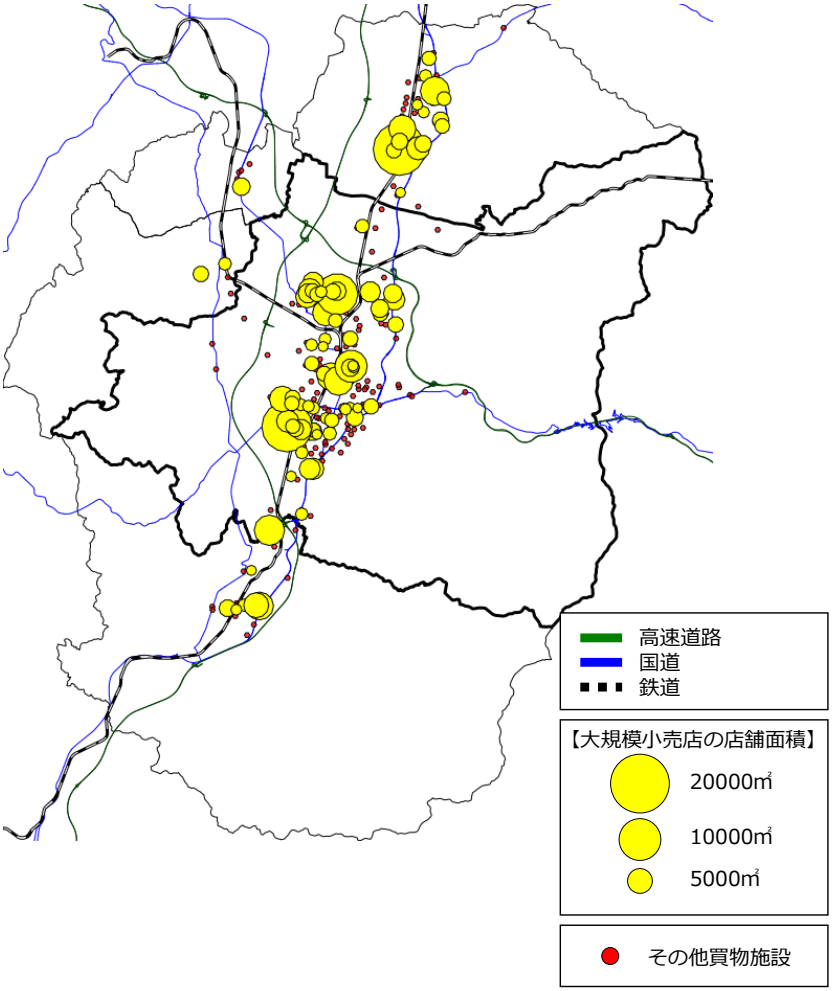


図　都市機能施設のプロット（買い物施設）

【都市機能施設の出典】

＜教育施設＞

・山形県学校名鑑（山形県）

＜医療施設＞

・山形県医療機関情報ネットワーク（山形県）の「病院」「一般診療所」

＜買い物施設＞

・全国大型小売店総覧 2019（東洋経済）

・コンビニ：NAVITIME（民間地図サイト）　など

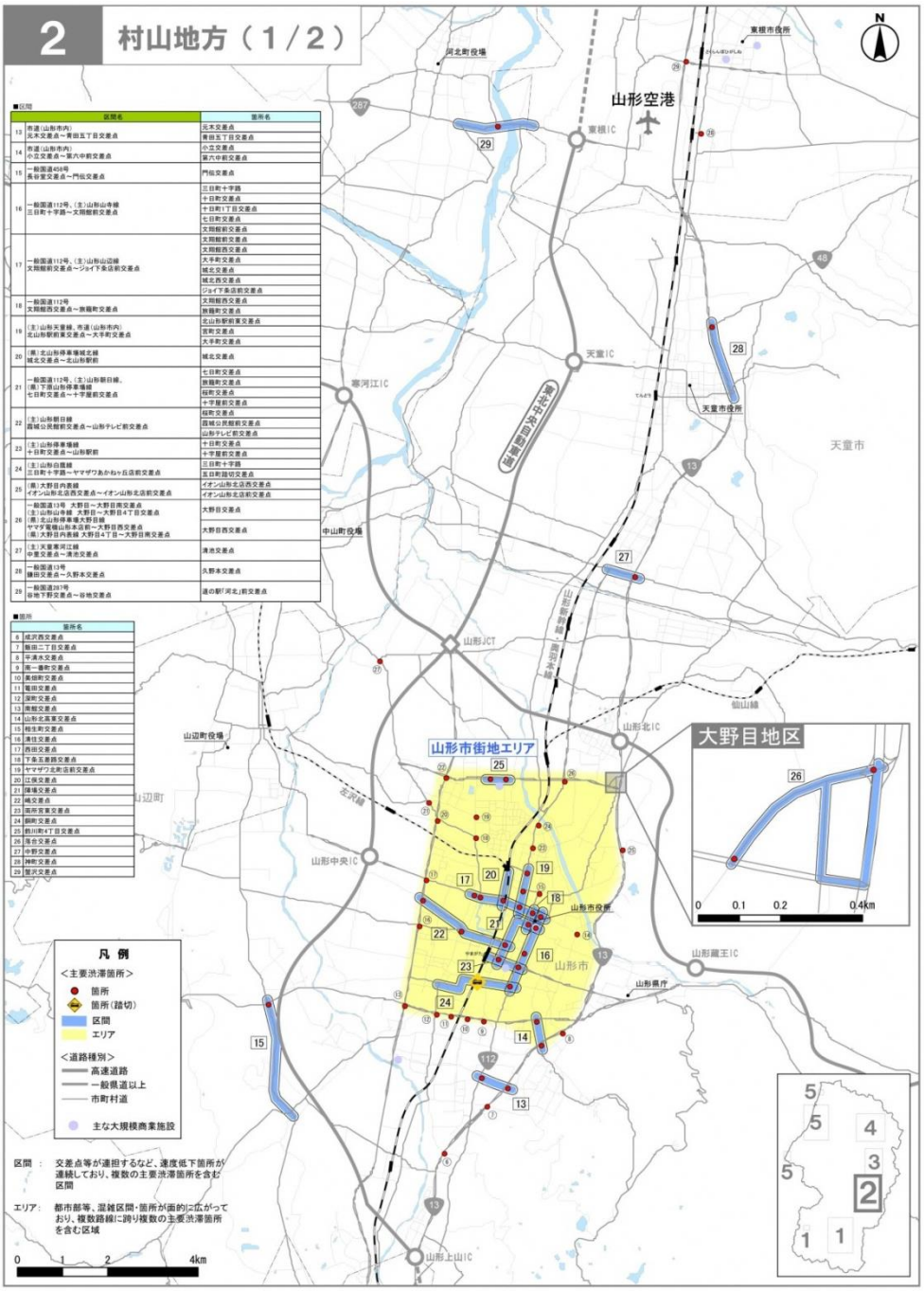
＜福祉施設＞

・介護サービス情報公表システム（厚生労働省）の「老人ホーム」「デイサービス」「サービス付き高齢者向け住宅」

（5） 交通施設の状況

ア 主要渋滞ポイント（道路）

山形県渋滞対策推進協議会がとりまとめた県内の主要渋滞ポイントによると、山形市の市街地エリアと、国道の一部区間などで主要渋滞ポイントが存在しています。



出典：山形県渋滞対策推進協議会資料

図 村山地域の主要渋滞ポイント

イ 鉄道

山形広域都市圏内にはＪＲ奥羽本線、ＪＲ仙山線、ＪＲ左沢線の３つの鉄道路線が運行しています。このうち、ＪＲ奥羽本線とＪＲ左沢線の平均通過人員は、近年横ばいで推移しています。ＪＲ仙山線の平均通過人員は、わずかに減少傾向が見られます。

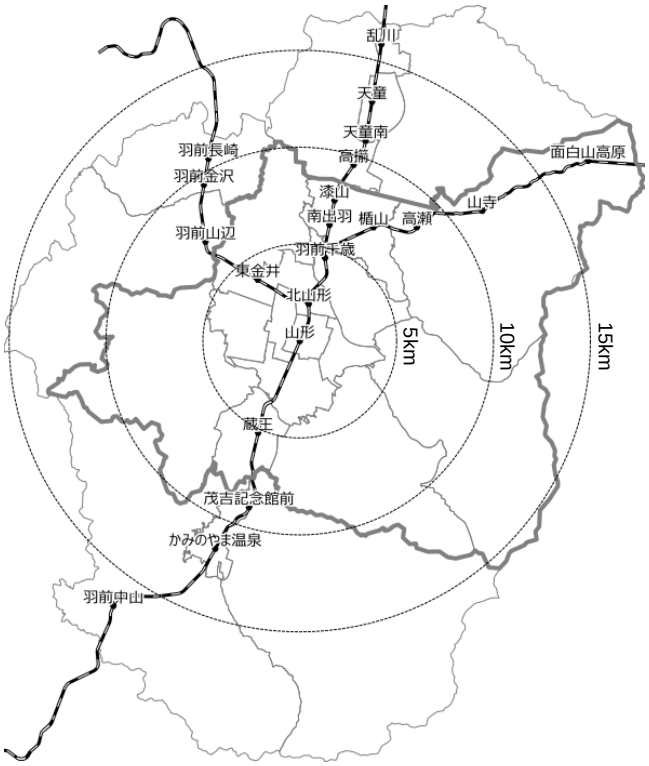
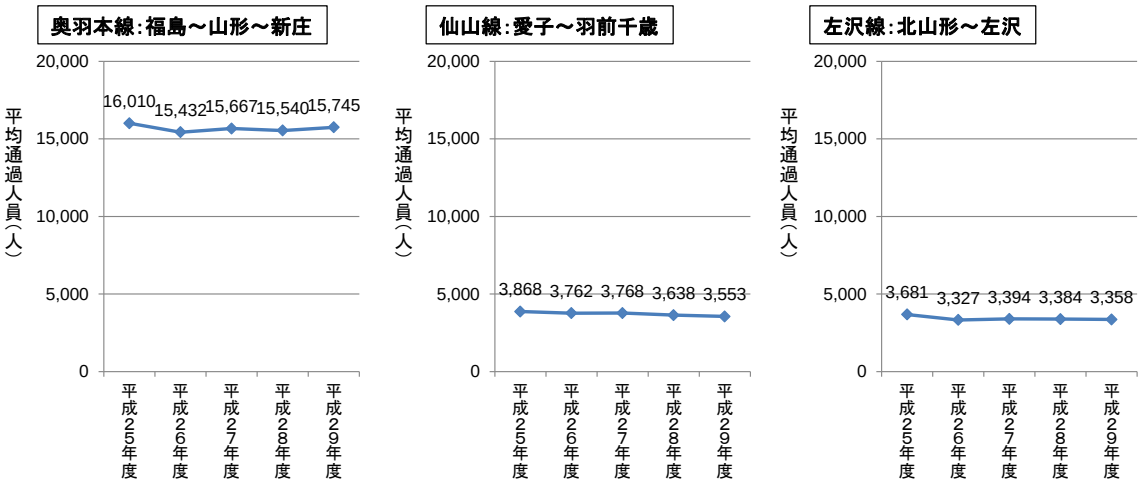


図　山形広域都市圏内の鉄道駅位置と路線図



出典：ＪＲ東日本「路線別ご利用状況」

図　路線別平均通過人員の推移

ウ　路線バス

山形広域都市圏における民間バス事業者と自治体運行バスをあわせたバス路線は、山形市の市街地中心から放射状へ伸びる路線網が形成されています。

運行本数で見ると、南北方向の路線で多くなっています。

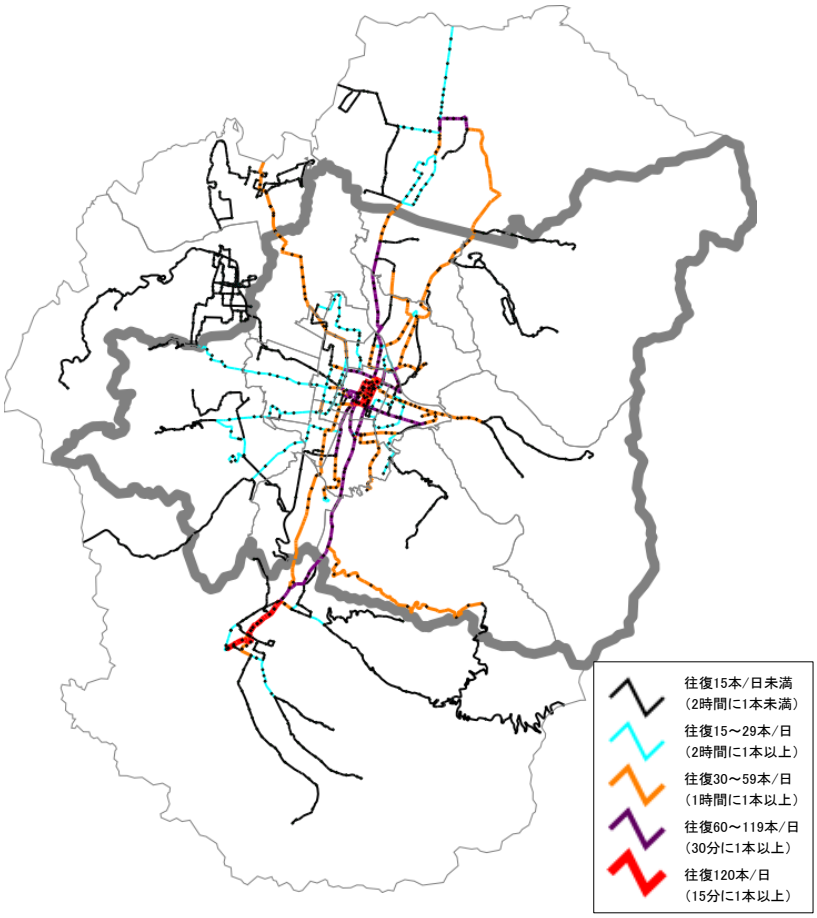


図　山形広域都市圏のバス路線と運行本数

（６） 公共交通の人口カバー圏

鉄道駅から半径１ｋｍ圏内の地域、バス停から半径３００ｍ圏内の地域をそれぞれの交通手段のカバー圏域と定義すると、山形市人口の約８割が公共交通のカバー圏域に居住していることになります。

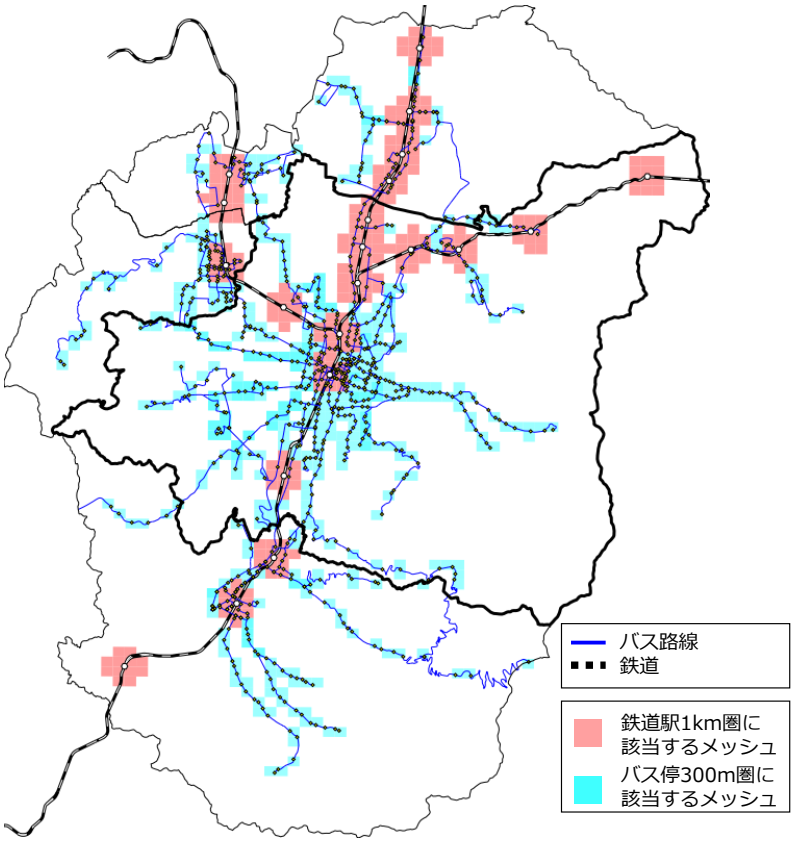
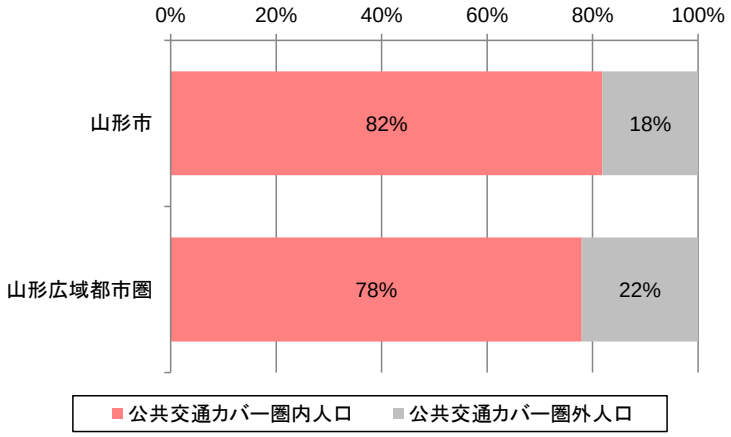


図　鉄道・バスのカバー圏



出典：平成２７年国勢調査

図　カバー圏域内外別・居住人口割合

（７）まとめ

山形広域都市圏の人口は、平成１７年をピークに近年減少傾向にあり、高齢者の割合も高まっています。山形市内の人口動向を地域別にみると、中心市街地やその周辺及び集落部で減少し、郊外の嶋・吉原などで増加しています。

世帯の動向で見ると、過去２０年で総世帯数は増加し、特に単身世帯が大幅に増加しています。単身世帯は市街化区域内での居住が多く、特に高齢者単身世帯は中心市街地で多い傾向があります。

市街地の動向で見ると、ＤＩＤ（人口集中地区）の人口と面積は増えていますが、人口密度は減少しています。嶋・吉原・蔵王成沢地区などの郊外に、大型商業施設の立地がみられます。

交通施設の観点から、近年の鉄道利用者数の推移で見ると、仙山線利用者は減少、他の路線の利用者数は横ばいとなっています。

バス路線は、中心市街地から放射方向の路線で構成されていますが、特に北・南・東方向の運行本数が多い状況です。これら鉄道とバスが利用可能な範囲に、山形市の約８割の人口が居住しています。

道路の観点から見ると、中心市街地とその周辺で渋滞が発生しています。